

*onaishigeo*

201207-01

百万回、言ってみる

*1000001kaimeni sinjitemoii*

**onaishigeo**

どうやって信じてもらおうか考えていた。この少女は、生まれて直ぐに捨てられた猫。残飯を漁って生き長らえてきた。他人なんか信じない。そもそも「信じる」ってことが分からない。生きて来られたことは奇跡に近かったが、自分で欲して保ってきた命ではない。飢餓感という、たぶん基本的な生存本能。それだけに突き動かされて生きてきた。だからつまり、彼女は「奇跡」とすら思っていない。

しかし残念ながら少女の運は尽きようとしていた。これからも生存できる確率に関しては、変わりはないかもしれない。違うのは、自分で漁ることなく餌が手に入るくらい。そして少女が本当の野良猫であったなら、存在の尊厳や恥辱など一切気にすることなくやり過ごせるのだが、残念ながら彼女は人間の少女。これから彼女を待ち受ける境遇を思うと、僕はたまらなくやりきれなかった。

少女は今、繁華街の裏の裏にある雑居ビルの一室に捕らわれていた。僕が放った罠にかかって。だから僕は、こっそりと少女に近づき、とりあえず自分の分のおにぎりを差し出した。

「何が目的？」

差し出したおにぎりを睨み付けながら少女が言う。

「目的なんかないよ。あ、でも、強いてあげれば、君を逃がしたい。それが目的かも」

「うそ」

言下に少女が否定した。

「うそじゃないよ」

「絶対に、うそ」

けんもほろろとは正にこのことだった。

13か4くらいだろう。痩せこけて、肌も荒れているが、栄養を取らせて手入れをすれば、たぶん見違える。ボスは、そういう少女を見つけてくることに長けていた。

「一種の才能さ」

感心してお世辞の一つも口にすると決まってそう答える。確かにろくでなしだったボスは、その才能のお陰で今も生きていられる。何が自分を救うか分かったものじゃない。

「だけど罠を仕掛ける才能はお前には敵わない。罠というか釣り竿か。狙った獲物は確実に釣り上げるんだからな」

そう、俺にも幸いなことに才能があった。言葉巧みにターゲットに近づき、この雑居ビルまで連

れてくる才能。この才能があったからボスに拾われ、そして今も生きていられる。才能は素晴らしい。けどこの少女には、どんな才能があるんだろう。きらきらと光った眼差しを見て僕は分かった。

「わかった。この子の才能は生き続けることだ」

膠着状態が続いて、僕は仕方なくおにぎりを引っ込めた。もうすぐボスが戻ってくる。あまり時間は残されていない。

「知らなかったのはもちろん罪じゃないんだけど、今からでも知ってほしい。この世にはね、信じられるものもあるってことをね」

「そんなものない」

「あるんだよ。ただ、残念ながら滅多にお目にはかかれない。多くの人間が、たぶん体験しないで死んでいくんじゃないのかな」

「ほら、そんなものないのも一緒」

「うーん、でも、最初からないと思っ込んでいるのと、あるかもしれないと思うのとは、だいぶ心持ちが違うと思うんだ」

「同じだよ、結局ないんだもの」

「ううん、あるんだ」

「ない、絶対に。第一、あんただって嘘付いてここに連れてきたし」

それは確かに謝らなければいけないことだった。しかし君は僕を信じたわけではなく、僕が提示した条件を信じただけ。それは単に世間の渡り方の優劣や経験値に過ぎず、僕自身を規定することではない。が、もう時間がない。だから僕は、弁解するのをやめて、才能がなくても出来る唯一のことをすることにした。

「だから、証明してあげるよ」

「なにを」

「僕がおにぎりの代償を何も求めてないってこと。つまり、無償の愛の存在を」

少女は僕の言葉を反芻し、ようやく意味が分かったようで、突然大袈裟に笑い出した。

「ばっかじゃないの」

「うん、バカだと思う」

「ホントばか。死んじまえ、お前なんか」

「うん、そのつもり」

僕はポケットから小さなナイフを取り出し、少女を拘束していたロープを切った。自由になった少女は後ずさりするが直ぐに壁にぶち当たる。とても不安そうな目。しかし僕は無視して少女に語りかけた。

「君は、たぶん、今までとても不運続きだった。そして、これからも、残念だけど不運は止まないだろう。だけどね、これからは少しだけ違う。何故なら君は、人間を信じられるようになる」

「信じないよ、わたしは」

何かが起こることを予感した少女の声は震えていた。

「いいから聞いて。僕には、残念ながら、他に才能がないので、これ以上のことをしてあげられない。だけどこの先、もしかしたら君を救う才能のある人間と、君は出会うかもしれない。そのとき、人を信じることを知らなかったら、もったいないだろ？ たからその時のために、僕が君に、人間は信じられるってことを教えてあげる。これが僕に出来る唯一のこと。どうか受け取って」

そして僕は、無理矢理おにぎりを少女に手渡した。虚を突かれた少女はうっかりおにぎりを受け取る。それを見届け、僕はさっき少女を自由にしたナイフで、自分の頸動脈を思い切り掻き切った。一瞬の焼けるような痛みした後、経験したことのない素早さで意識が遠のいていく。

(ほら、死んじゃったら何も要求できないだろ。...あれ?)

薄れ行く意識の中で少女を見やり、僕は心の中で舌打ちをした。

(ああ、しくじった。おにぎりが、血で真っ赤っかになっちゃった)

そして僕は意識を失った。コンクリートの床に激突するとほぼ同時に。

「無償の愛なんてない！」

差し出したおにぎりを睨みつけながら少女は言う。

「あるよ」

「ない！」

「あるって」

「絶対ない！」

仕方なく僕は無償の愛を証明する。

無理矢理おにぎりを少女に手渡し、ナイフで自分の頸動脈を掻き切った。

あ、ごめん。おにぎりに血が降りかかっちゃった...

驚いた少女の顔を横目に見ながら、僕は満足して瞳を閉じた。

## 百万回、言ってみる

<http://p.booklog.jp/book/53976>

2012.07.21

著者 : onaishigeo

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/onai/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53976>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53976>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブックログ